Kyoto Kougei Trip | issue SHIMOGYO

京都工芸散歩 下京

CRAFT POINT KYOTO

ISSUE 下京

新旧の強烈なコントラストに目が眩みそうになるのが、このエリアの特徴だ。西本願寺に数ある国宝建築のひとつ、唐門から旅を始めたい。

格式高き重厚感と細部の繊細さを兼ね備えた造形は、伝統技法の賜物。大工や職人の間では「あれは見ておけ」と言われるお手本的存在というのも納得だ。境内を散策した後は、西本願寺と東本願寺の間を結ぶ日本随一の仏具街へ。通りには、仏具や法衣や数珠やお香などを扱う仏具屋が軒を連ね、門前町を形成している。あまり縁がなさそう…などと思うことなかれ。多くの門前町がお土産物通りと化すなか、本来の“門前町”を歩くこと自体に意味があるのだ。仏具屋町、珠数屋町などという地名も面白い。

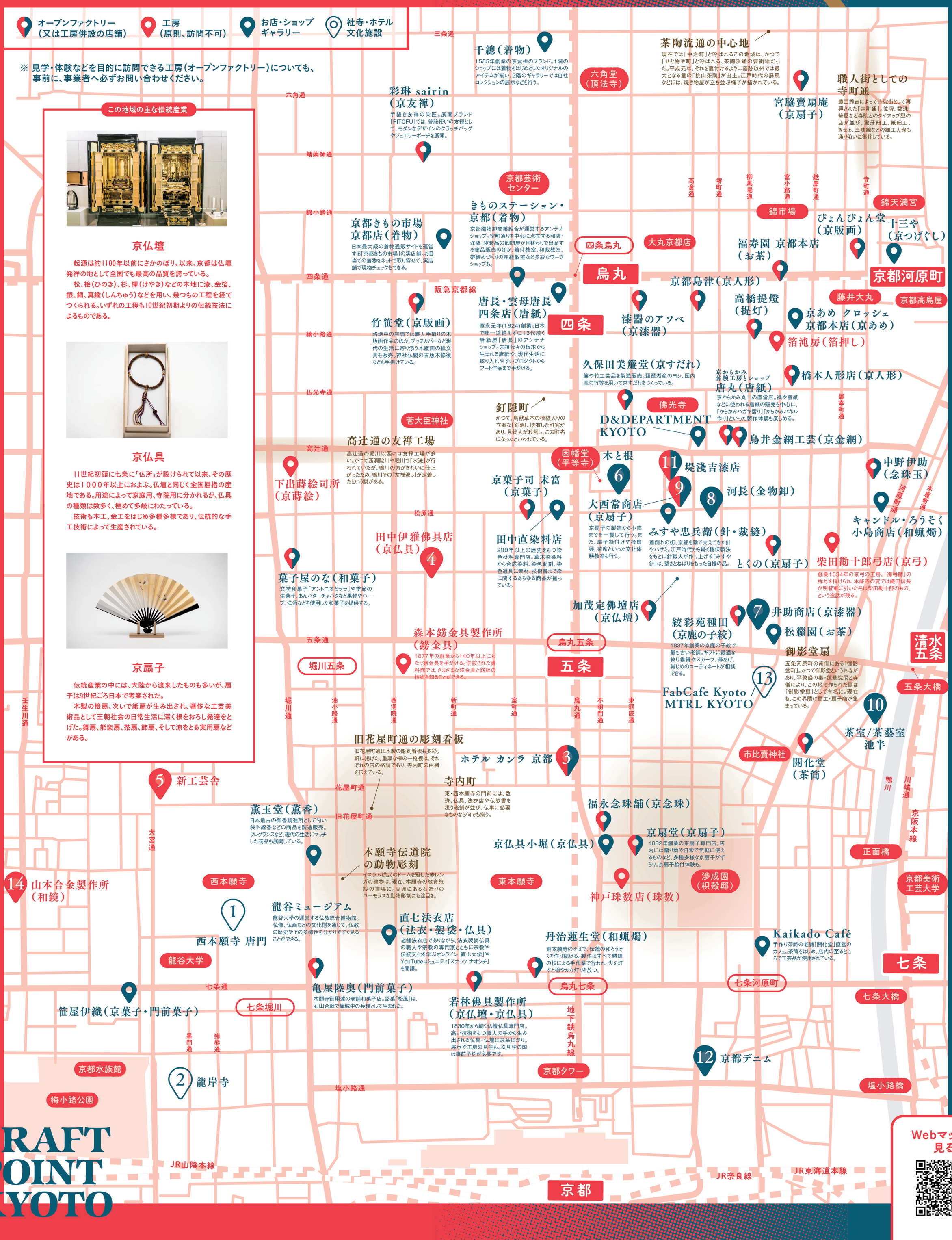
こうした重厚な伝統のすぐそばに、イノベーションナルな物作りの場が増えている。西本願寺の北側には3Dプリンタであたらしい工芸に挑む「新工芸舎」や、東本願寺の北側には伝統技術を取り入れたデザインホテル「カンラ」が。少し東には、人と人との繋がりを生むファブリケーション施設「FabCafe Kyoto」もある。かつて花街として栄えた島原や清水五条にも若いクリエイターが集まり注目度は上昇中だ。

京都の伝統産業 Traditional Industries of Kyoto

@densannohi

京都伝統産業ミュージアム Kyoto Museum of Crafts and Design

主催：京都市、京都伝統産業ミュージアム（株式会社 京都産業振興センター） https://kmtc.jp/



この地域の主な伝統産業

京仏壇

起源は約1100年以前にさかのぼり、以来、京都は仏壇発祥の地として全国でも最高の品質を誇っている。

松、桧（ひのき）、杉、欅（けやき）などの木地に漆、金箔、銀、銅、真鍮（しんちゅう）などを用い、幾つもの工程を経てつくられる。いずれの工程も10世紀初期よりの伝統技法によるものである。

京仏具

11世紀初頭に七条に「仏所」が設けられて以来、その歴史は1000年以上におよぶ。仏壇と同じく全国屈指の産地である。用途によって家庭用、寺院用に分かれるが、仏具の種類は数多く、極めて多岐にわたっている。

技術も木工、金工をはじめ多種多様であり、伝統的な手工技術によって生産されている。

京扇子

伝統産業の中には、大陸から渡来したものも多いが、扇子は9世紀ごろ日本で考案された。

木製の桧扇、次いで紙扇が生み出され、奢侈な工芸美術品として王朝社会の日常生活に深く根をおろし発達をとげた。舞扇、能楽扇、茶扇、飾扇、そして涼をとる実用扇などがある。

CRAFT POINT KYOTO

京都工芸地図 | Kyoto Kougei Trip | issue SHIMOGYO

Webマップを見る

01 桃山建築の代表作にして、工芸の集大成。西本願寺の唐門に見とれよう。

浄土真宗本願寺派の本山、本願寺。その唐門といえば、伏見城の遺構ともいわれる高さ8.6mの堂々たる唐破風造りで、国宝にも指定された桃山時代の一級建築だ。およそ2年半をかけた大規模修復が2021年に完了、一般公開が始まったことで今また注目を集めている。そもそもこの唐門、柱から扉までの門全体が黒漆で塗られ、その上に極彩色の彫刻、錺（かざり）金具で飾った、巨大な工芸品ともいえるもの。今回の修復では、まず錺金具をすべて（その数、473か所！）はずした上で、門の傷んだ部分を補修し、あらためて黒漆が塗られた。もちろん、下地を調整した後に下塗り、中塗り、上塗りと塗り重ねる漆塗の工程は入念に行われ、頬ずりしたくなるような漆黒のツヤが蘇っている。漆ツウな読者には、一部の修復部には墨研ぎ〜生漆の擦り込みによる、漆仕上げの最高峰「蠟色（ろいろ）仕上げ」まで行われていることをお伝えしておく。

また、絢爛豪華な彫刻（こちらは全部で107点！）もクリーニング、補修と同時に、残された顔料を調査した上で、天然の岩絵具を塗り重ねて彩色された。他にも、葺替を行った檜皮葺（ひわだぶき）の屋根の清新さ、修復された錺金具の輝きなど、知れば知るほどに巨大門のディテールにも目を奪われるはず。ついつい見惚れて日が暮れてしまうことから「日暮門（ひぐらしもん）」とも呼ばれてきた唐門だが、令和の今になってもその呼び名に異論はない。

① 西本願寺 唐門

☎075-371-5181　下京区堀川通花屋町下ル本願寺門前町　北小路通から見える南面は常時公開　無料

一連の修復作業については、西本願寺のウェブサイト「お西さん」で詳細に写真付きで発信されている。工芸好きは必見。

02 「佛佛部」のガチャには、仏具職人たちの遊び心と本気が詰まっている。

下京にあるお寺「龍岸寺」を拠点に、本堂でドローン仏を飛ばしたり、仏具職人たちによるガチャを展開するなど、にぎやかに活動している仏具系ポップユニット「佛佛部（ぶつぶつぶ）」。…って、あまりに耳慣れない情報が多すぎて、整理が必要かもしれない。「京都には数多くの工芸があるなかで、仏具文化を広めるために仏師、塗師、箔押師、宮大工、錺金具師の仏具職人が結集しました。その中心にお寺さんがあることで、単なる職人集団ではない、仏具の本道を行く活動になっているかなと思っています」とリーダーで仏師の三浦さん。形にこだわるのではなく、現代にあったポップなやり方で仕掛けたいという点でも意気投合したのが龍岸寺の池口住職。「僕としては形を残すのではなく、技を残したくて。祈りという気持ちは昔も今も変わらないと思うので、現代にあった形で技術を使っていければと思います」。そんな佛佛部の試みのひとつが、仏具職人たちによる新感覚な工芸グッズのガチャ販売というわけだ。その中身を特別に教えてもらうと、❶槍を一刀彫した手のひらサイズの仏像、❷朱塗り・黒艶・溜塗りで漆塗したブローチ、❸仏壇の柱に使われる錺金具のキーホルダー、❹3Dプリンターで成形・再現した宮大工の「金輪継ぎ（かなわつぎ）」、❺あえて金沢産縁付金箔を使用したゴルフボール…。ふざけてるようで実は結構、本気。佛佛部ガチャで仏具文化入門、オススメです。

左から錺金具師 竹内直希さん、箔押師 藤澤のりふみさん、池口龍法住職、仏師 三浦耀山さん、塗師 伊東泰範さん、宮大工 横川総一郎さん。他に仏具を愛するアイドル部員なども所属。

龍岸寺客殿に置かれた佛佛部ガチャ、1回2,000円。「念持仏造立教室」などの佛佛部の最新情報は、Twitter：@B2B2BU で発信中。

② 龍岸寺

☎075-371-0370　下京区塩小路通大宮東入八条坊門町564

03 グッドデザインなホテルには金継ぎ工房があります。

京唐紙のふすま、京焼のタイルや洗面台、西陣焼きのフットスローなどの伝統技術を全館にわたって取り入れた「ホテル カンラ 京都」は、東本願寺のすぐ北に位置するデザインホテル。1階ラウンジ横には、京都を中心に各地の手工芸品を集めたショップが併設され、その目利きの効いたセレクトからショップを目指して訪れる地元民もいるのだとか。そして、気になるのがショップ脇に置かれた金継ぎ工房だ。ガラスで仕切られた小空間では日常的に金継ぎ作業が行われている。当然、物珍しさから観光客がガラスの周りを取り巻くこともあるそうで、「作業に集中しすぎてそれに気づかないこともありましたけど（笑）、興味を持たれた方にはなるべくご説明しています」とは常勤する職人さんの話。実は、温度湿度が安定したホテルの環境は金継ぎ作業にも最適なのだそう。宿泊客でなくても金継ぎの依頼は可能。興味がある方はぜひ。

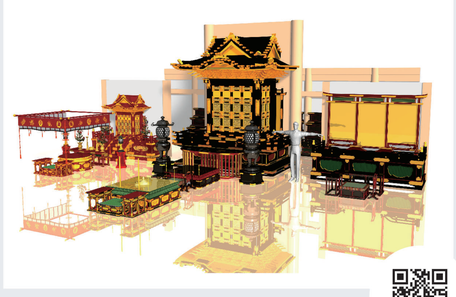
③ ホテル カンラ 京都

☎075-344-3815　下京区烏丸通六条下ル北町190　ショップの営業は9:00〜19:00、金継ぎ工房は10:00〜17:00（月曜休）

金継ぎ工房リウムは、月曜日以外の毎日、3人の金継ぎ職人が交互に入って作業している。隣りのショップでは、金継ぎした陶磁器の販売も。

04 創業は885年。日本屈指の超老舗、田中伊雅佛具店の思いがけない新しさ。

創業して1100年を越える超長寿企業の田中伊雅（いが）佛具店は、真言宗や天台宗といった密教系の仏具を主に扱っている。仏具の世界では宗派により使う仏具が異なり、なかでも密教系はより特殊性が強く、これを専門に扱うのは京都では田中伊雅だけだそう。そんな田中伊雅のウェブサイトには、商品紹介と並んでCGギャラリーがある。CGで描かれた仏具はやけに斬新なデザインに見えるが、これは一体…？「もう10何年前からCGを活用しています。うちでは、基本的にオリジナルな商品を提案するから、CGのほうがわかりやすいでしょ」。さも当然だとばかりに話してくれたのは、田中伊雅70代目社長、田中雅一さん。守るべき基本形を保ちながら常に新しいデザインを提案してきた田中伊雅。結果的に商品は高額となり、昨年は「日本一値段が高い仏具店」という見出しの取材記事も出た。「それも歴史があって、間違いない商品を納めているという前提があって成り立つ記事ですよね。うちは高いですよ」と笑う田中社長だった。



CGは外部デザイナーではなくすべて社内で手がける。毎年刊行する年間カタログでは、赤青メガネを付属して立体視できるデザインにしたことも。

④ 田中伊雅佛具店

☎075-351-2584　下京区万寿寺西洞院東入ル　一般見学不可

05 伝統工芸ならぬ新工芸!? 設計者集団「新工芸舎」の試みとは。

「新工芸舎」は、3Dプリンターの普及を目指す「YOKOITO」から発足した設計者集団として、かつての下京図書館の建物を再活用した「淳風bizQ」を拠点に活動中。デジタルファブリケーションによって新しいアイデアに形を与え、問題の解決法を模索しながら、自らの手でものづくりする喜びを取り戻そうとしている。たとえば、その成果のひとつが西陣織の手機用の杼（ひ）。西陣にいまや一人となった杼職人が現役で活躍しているが、未来のことを憂う織師から相談を受けて、新工芸舎とともに活動する足立製作所の足立さんが試作を重ね、3Dプリンターで新たな杼を製作。「杼職人さんがつくられてるものより、まだまだ同じような価格では作れないのですが、つくったものは実際にもう何年も現場で使っていただいてます」と足立さん。海外発、横文字文化のデジタルファブリケーションを、いかに日本の伝統と地続きのものとして捉えられるか。「新工芸舎」という名前には、その思いが込められている。

織機の杼の他にも、新工芸舎では天然石などの自然物に寄り添うようなプロダクト「のせ物」や、3Dプリンターで編むように積み重ねた「tilde」などを開発。

右が足立正さん、左は新工芸舎 主宰の三田地博史さん。淳風bizQにあるSTUDIOは一般公開していない。

⑤ 新工芸舎

☎075-354-6424　下京区堀之上町540 淳風BizQ　一般見学不可

工芸的視点で見た下京の歩き方

このエリアに関わりのある方に、工芸という観点から見たおすすめの場所 ヒト モノ を聞いてみました。

⑥ 木と根

暮らしの中で使うことのできる、温かみのある工芸を販売されている木と根さん。くつろげるカフェも併設されており、かき氷の季節はお客様でいっぱいになることも。定期的に工芸作家をピックアップした展示もされています。

⑦ 漆の井助商店

創業180年の歴史を誇る井助商店さん。漆塗を施した眼鏡がトレードマークの優しくて面白い社長、とってもなかよしです。そのショップ「漆器の井助」では茶道用の棗（なつめ）から漆塗のお箸まで幅広く扱われており、井助さんをのぞけば漆の商品はなんでもあります。

⑧ 金物卸の河長

金物全般をはじめ、箪笥に使うつまみや襖引手、蝶番なども幅広く取り扱われています。工芸の職人さんや伝統文化への造詣が深い社長さんです。自社の奥にギャラリースペースを作られていて、金継教室などのお稽古場としても利用されています。

⑨ 扇子屋若女将 大西里枝さん

大学卒業後、通信企業勤務を経て、家業である京扇子製造卸元「大西常徳店」に入社。担当業務は、扇の特性を利用したルームフレグランスの開発や営業など。

⑩ 茶藝室の池半

一棟貸しのお宿を営むご夫婦の茶室。壁、床、天井、テーブルまでハタノワタル氏による和紙総貼りで、凛としながらも癒しの空間です。不定期に催される茶器を中心とした展覧会では、作家さんの新しい試みを拝見できます。茶農家直送の茶葉で淹れた喫茶コースもぜひ。

⑪ 漆屋の堤卓也さん

塗漆に関する事業を営む「堤淺吉漆店」の4代目。漆の適性をサーフボードや自転車などに展開することで漆の存在意義を革新し、ポテンシャルを引き出すイノベーターです。氏の思いやりをもった想像力はこれからの生き方のひとつの指針にさえなると思います。

⑫ 京都デニムのデニムエプロン

着物に使用される本物の技術を、デニムという時間が経っても価値が増す素材に昇華。日本らしく、日常生活の中で活用できる「用の美」を追求したデザインプロダクトを製作する世界で唯一のブランド、そのデニムエプロンは経年変化が楽しみ。

⑬ FabCafe Kyoto / MTRL KYOTO

各地のものづくりコミュニティと接続する拠点で開催されるイベントには企業の垣根はなく、伝統工芸や最先端技術、サスティナブルな新素材など、多様な素材と出会えます。素材から生まれるイノベーションや新しい「つくる」が生まれる交流の場所。

FOCUS! SHIMABARA

京都・島原は、かつて江戸幕府公認の格式高い花街として栄えた場所。島原がもっともっとフォーカスされることを願って、このエリアを拠点に活動するクリエイター、アーティスト、職人やお店などの「寄り合いみたいなコミュニティ」が仕掛ける企画に期待大。

⑭ 鏡師 山本晃久さん

山本合金製作所5代目。大学卒業後、祖父・山本晟龍に師事。平安時代から伝わる技法で、銅鏡や魔鏡を製作。工房のある島原エリアとの縁も深い。

編集：池尾 優、竹内 厚、bank to　デザイン：猿田真維（bank to）　撮影：小檜山貴裕